

柳生武芸帳卷之一陰流五味康祐



柳生武藝帳

卷之一

陰 かげの
ながれ 流

五味康祐

帳藝式生柳

流陰之一卷

昭和三十一年八月十五日 發行
昭和三十一年十二月二十日 四刷

定價貳百六拾圓

地方賣價 貳百七拾圓

著者 五味康祐

東京都新宿區矢來町七十一

發行者 佐藤亮一

東京都千代田區神田神保町三ノ二三

印刷者 塚田重

印刷所 塚田印刷株式會社

東京都新宿區矢來町七十一

發行所 株式會社新潮社

電話東京三四局代表七二一(八〇)
振替東京 八〇八番

製本 神田加藤製本所

卷之一
目次

劍	襖	燭	く ノ 一 の 術 (二)	く ノ 一 の 術 (一)	幼 君 ・ 千 代 松	鍋 島 の 柳 生 者	夕 姫	霞 の 忍 者	陰 流
菱		臺							
二八	一〇三	七〇	六六	六四	五〇	完	三四	二〇	七

尼	乞	壯	左	春	夕	夕	半	仕
	食		衛	日				
	法		門		顏	顏		
僧	師	丹	橋	局	(二)	(一)	弓	官
.....
三四	三三	三〇	二七	二六	二三	二五	二四	二三

裝幀・挿繪

木

下

二

介

柳生武藝帳 卷之一

陰流

唐津藩主寺澤堅高てらさわかたかが自殺する六日前に、所定の刻限を俟まちって大廣間に姿を見せると居並ぶ者は顔色を引緊めた。堅高は三十九歳。唐津八萬石寺澤志摩守廣高の二男で、六日後に自刃すべきか否かがこれからの評定できまる。きめるのは武藝者山田浮月齋である。その浮月齋が、堅高の上座に向つて、既に廣間の中央に端坐して靜かに瞑日している。白い髻と、銀髪が房々肩に垂れている。もう小半刻、彼はそうして靜坐した儘である。定刻前に前後して評定所に這入つて來た家臣らは、いずれも、浮月齋のそんな容姿に思わず目を伏せ、沈痛の色を泛べた。主君の運命が早や決せられたと見たのである。——菅たぐ、それなら何ういう理由でか？ 浮月齋は如何なる根據を以て主君に死を迫るのか、それが知り度い。一樣に言葉にこそ出さないが、主君堅高の死の如何に依つては殉死して後を追わねばならぬ。それで、上座から順次所定の席に着きながら、各自齋じやうしく聲を嚙くんで、堅高の來場を待つあいだ隣りと私語する者もなかつた。中には、黙つて浮月齋の横顔を熟視している家臣もあつた。

堅高の自殺は、表向きは島原の亂の責を蒙つて、地領四萬石を召放された事が理由になつてい

る。父・志摩守廣高に受け継いだ本領を失って面目なく、且つそれを口惜しんで死んだというのである。併し、四萬石の所領を召上げられたのは既に十年前である。もともと唐津城主寺澤氏の本領は、豊臣秀吉が征韓の軍の折、領内、名護屋の地に本陣を布いたので、それ迄の米奉行六萬石から八萬石に加封された。ついで秀吉薨じて後、關ヶ原の役に寺澤藩は徳川方に與して功績があったので、其の勤賞に肥後の國天草四萬石を加えられ、併せて十二萬石の大名となった。寛永十年四月十一日に志摩守廣高は卒し、嫡子刑部少輔忠清は父に先立って逝っていたから、次男の堅高が家を継いだのである。當時堅高は兵庫頭に任じられ二十五歳である。

寛永十四年島原の亂が起った時、堅高は身命を抛って力戦した。領地内に變事が起ったのは政道の至らぬ故で當然死罪になる處を、その功で罪を減じられ、四萬石の削除で濟んだ。謂わば、だから自殺する程の事はなかったわけだった。然も封を削られて十年を経過した正保四年十一月十三日の今、堅高の生死は一兵法者の手中に委ねられている——

太刀持ちの小姓を従えて堅高が正面の座に着くと、廣間の左右に居並んだ家臣は一齊に頭を垂れた。常と異って、容易に誰もあげる者が無い。それと見た堅高の片眉がピクリと動いたが、落着いた語調で、

「一同、大儀であるぞ。——始めて呉れい。」

對面の浮月齋へは殊更視線を避けて、左右の重臣をかえり見た。この評定の密命を受け、ひそかに江戸表から駆けつけた老臣もある。それで大儀と言ったのである。

「然らば浮月齋——」

家臣の上座にある家老・平野内記が強い眼差で膝を向けた。

「其許深謀の意見なるもの、これにて申し述べられい。」

浮月齋は六十二歳の老齢で、先君志摩守廣高が終身、師の禮をとった劍術者である。廣高が卒してからは、師範の役目を辭して作禮山に隱棲していた。家老平野の聲に、重い臉を初めて薄目にあけた。堅高以下一同の視線がその面上に集注した。

「されば申上げる。」

浮月齋は堅高を見た。「事茲に至っては、無念乍ら殿の御自害あるのみじゃ。」

「予は敢て死は怖れぬぞ。併し、わけを申せ。」

「人爲のきわまる所でござる。」

「人爲？」

「されば、今、人城に登り、山に上りて人を見おろすは、人怨みとがめず。大家二階三階を作りて登れば、人は是を咎め惡む。人も亦智にはこり才を以て秀るものは人忌み憎む。位高く徳あるものは怨み咎めず。是自然にして作り事にあらず、高きを忘るゝが故でござる。——徳川内府の將軍は自然なれども、石田三成が秀吉公の故智にならわんと爲せしは、人爲。天下の大勢遂にこの理を出でざれば、殿が御企みも人爲を出でず、と申上げるのじゃ。」

「待たれい。」

家老の次席、池田三郎兵衛が不意に言葉を挟んだ。寺澤藩きつての勇將と謳われた池田市郎兵衛隆成の嫡男で、これはまだ二十七歳の血氣盛りである。

「殿の御企みと申されたが、何を以て、左様の企みありとお手前は判断召される？」

「儂が致すのではない。公儀に於て、企みありと見破ったのじゃ。」

「な、何と……？」

「此處は九州の邊陲、よも江戸表へ洩れは致すまいと思ふは武略の何たるかを知らぬ輕率。公儀に隱密あり、諸藩に目付あり、策謀は手に取る如く幕府が耳目に。」

「待て浮月齋。」

堅高が青ざめた頬に、無理に笑いをうかべて言った。

「如何にも、企むところ無かつたとは申さぬ。併し我らとて、公儀目付の何たるかは存じておるぞ。輕々に意圖を察知される言動は取った覚えもない。それが、江戸表に知れているとは思議じゃ。又、當城下を離れ、作禮山の奥深く棲む筈の其方迄が知っているとは、愈々もって納得が參らぬ。」

「殿。某は正田陰流の衣鉢を繼ぐ者、公儀には同じ陰の流れをくむ柳生者が居りまする。」

「如何にも柳生は新陰流じゃ。それが予の企みに何の關わりがある？」

「まだお分りにならぬか、柳生の正體——」浮月齋は底光りのある眼で上段の堅高を見、ジロリと左右を見廻して、

「されば申上げよう。」

膝前の鐵扇を取直すと、ひと膝進み出て、一同の想像だにしなかつた柳生流の正體を暴露した。

浮月齋山田太右衛門は自ら名乗つた如く疋田文五郎の直弟子である。従つて柳生石舟齋宗嚴とは兄弟弟子に當る。新陰流の始祖上泉伊勢守が柳生に立寄つた時、當時中條流の達人と稱された宗嚴は、伊勢守信綱の甥疋田文五郎と立合つて三度敗れた。以來信綱を柳生の庄にとどめ、信綱、文五郎の兩人に就いて修行をした。その後、文五郎の方は間もなく上泉信綱と別れて單身修行の旅に出、天正年間丹後に到つて、當時宮津城主だつた細川幽齋に仕えた。のち、天正十七年に關白秀次の師範となつたが、文祿四年五十九歳餘りで剃髮して栖雲齋と號し、再び諸國漫遊の旅に出た。そうして七年後の慶長六年四月十八日、豊前中津城に舊主細川忠興を訪うて兵法を講述して百五十石、後三百五十石を以て仕え、門下に上野左馬之助を出した。

其の後復また仕えを辭して九州各地を廻り、肥前唐津に足を留めた時に教えたのが、山田浮月齋である。浮月齋は其頃寺澤志摩守廣高の小姓である。

主君廣高は織田信長の賤臣より身を興した。いかにも戰國の武將らしい大名で、毎日寅ノ刻よる(四時)に起き、食前には必ず馬をせめた。肥前唐津は麥作の多い土地なので五六月には家中の者を

麥飯とし、自らも麥のみを食したといわれる。衣服は常に木綿を着て刀槍の稽古の間は一汁一菜、終生茶の湯や連歌は好まなかった。そういう武將だったから、浮月齋が修行ののち抜群の技倆を身につけると、憚る處なく師として遇したのである。

藩主がこの様だから、家中の誰彼も、當初は一介いひの小姓如きにと不満を鳴らす向きもあったが、次第に山田太右衛門に師事するようになった。尤も、これには唐津藩隨一の勇將池田市郎兵衛の心酔も與あづかって力があつた。

市郎兵衛は首供養をした程の武功者である。廣高は茶の代として四百石の所得ある一村を與え、使つかいの用として鐵砲足輕二十人を附けた。或時、市郎兵衛の勇名に惚れて他藩から三千石を以て招いた事がある。市郎兵衛は一顧も與えなかつた。それで、廣高は「我も三千石を與えずば道に背こう。」と新たに祿を加えると、市郎兵衛は辭して言つた。「拙者は祿の如何で君に仕える者ではござらぬ。一村にて衣食の温飽には事缺かず、もし武功を以て論じ給わんか、憚り乍ら御家老平野氏の八千石を頂戴致すとも、又、一萬石を賜るとも充分ではござるまい。」と呵々哄笑した。

こういふ人物だから生涯に逸事が多いが、或時、戦いに敗れて退く折、田の畔ほとに味方の侍が腰をすえ、重手に惱んで市郎兵衛を見て助けを求めた。市郎兵衛は馬より降り、手負を抱き乗せ、自ら馬の口を把つて退いた。途中、敵兩三名がバラバラと追い掛けて来るのを、振返つて片手で二人を突き拂い一人を田樂刺しにして遂に脱出した事がある。助けられた侍も武邊に名のある人

物だったから、後に黒田長政に仕えたが、一夜の雑談に右の事を語ると、長政は話を忘れず、寺澤廣高の屋敷を訪ねた時にこの話を持出した。そこで廣高は早速市郎兵衛を呼んで讚稱したところ、彼は意外にも顔を赧らめ、こう言ったのである。「あの時は、助けて呉れと云われ實は心中に驚き候。凡そ敗戦には身一つだに落つるは容易の事に候わず。捨殺しに致さんと存じ候えども、殿しんがするもの我のみならず、もし他人ありて後に來り、此者を助け候わば、我が男が立たずと存じ、思い返して是非なく、——左様、是非なく助け候。」聞いて廣高も長政も腹藏なき事に一そ
う感歎したが、とくに長政は、

「潔白ナルコト雷雨に洗ワレタル瑯玕ろうかんノ憂然うれぜんト鳴ルガゴトシ。」

と稱揚した。のちに、席を退出した市郎兵衛をとらえて、あまりと云えば有りの儘なる云い様をするものかな、と人が云うと、彼は黒々と毛の生えた胸を叩いて示し、

「某それがしは表裏ある言行をなすまじとこの胸に誓うたのじゃ。誓わせてくれたは誰あろう、山田太右衛門じゃ。」

と云ったという。

これ程の勇士から信頼された浮月齋である。作禮山に隠棲しても、藩主堅高の生死に關わる大切の場合に、天下の趨勢を睨んで家臣一同へ否應いやおうのない評定の斷を下し得るのである。

ところで浮月齋の暴露した柳生流の正體だが、

「他でもない、柳生は忍びの術が本體じゃ。」

と言うのだ。

「忍び?——」

一同は呆氣にとられる。かりそめにも將軍家兵法指南たる柳生流が、下賤の術と蔑まれる忍術などとは。「浮月齋どの、如何に公儀に内密の此の場所とて、ちと言葉が過ぎましようぞ。それとも殿御自害の豫測に、氣でも觸れられたか。」

血氣にまかせて三郎兵衛が青ざめ乍ら扇子でトトンと聲を敲いた。柳生は天下の大目付である。即ち老中の耳目となり諸大名を監察する。一方忍者は、伊賀者、甲賀者と呼ばれ、戦國の世にこそ、間者や刺客として珍重されたか、泰平の世となった今は、『間者として役立った』その事によって人々に嫌惡され蔑視される。正々堂々と戦う彼等でない事、今日は甲の大名に付き、明日は背いて乙の武將の利の爲に働くさういう在り方が、武士道の潔癖の前で嫌惡されるのは自然の情である。『大目付という役名』で諸藩の上にある柳生が、だから若し寔に忍者だということなら、藩政を監視される諸藩は擧げて騒ぎ立て、屈辱感と瞋りで幕府の要職を詰るにちがいない。結果、どの様な事態にいたるやも知れないのである。政道に術策を弄するのは爲政者の勝手である。併し術策が武士らしい腹藝によるか、忍者を使った卑劣の手段に據ったかは、策に陥った者の肚の斂まり方が違う。